The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	銀雀山漢墓竹簡に関する新情報について : 山東博物館学術調査報告
Author(s)	椛島, 雅弘
Citation	中国研究集刊. 2019, 65, p. 115-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　李号（総六十五号）令和元年六月　一一五―一二一頁

銀雀山漢墓竹簡に関する新情報について

――山東博物館学術調査報告

椛島雅弘

一、銀雀山漢墓竹簡の情報公開状況について

銀雀山漢墓竹簡とは、一九七二年、中国山東省臨沂県の漢墓より発見された竹簡群の総称である(注1)。竹簡の総数は約七五〇〇枚、そのうち文字が確認できる竹簡は約五〇〇〇枚であった。字体の大部分は隷書体に属し、前漢の文帝・景帝の頃から武帝初期に至るまでに書かれたものと推測される。内容は軍事・兵学関係のものが多く、竹簡を副葬された墓主は、生前軍事家であったと見なされている。

竹簡は発見後、北京で脱水加工や整理作業が行われ、一九七五年に『孫臏兵法』、翌一九七六年に『孫子』の釈文と竹簡の写真・摸本を掲載した図版がそれぞれ出版された(注2)。これは恐らく、当初発見された文献のうち特に注目されたのが、『孫子』『孫臏兵法』だったことに由来する。

その後も竹簡の整理・解読は進み、一九八五年に『銀雀山漢墓竹簡〔壹〕』（銀雀山漢墓竹簡整理小組編、文物出版社）が出版される。本書は、『尉繚子』『晏子』『六韜』といった文献や、『孫子』の佚篇とされる四篇等が収録された。ここで注意すべきなのが、先に出版された『孫子』『孫臏兵法』の配列・釈文・分類について、少なからず修正して再収録されている点である。

第一輯の刊行後、二十四年の年月を経て、二〇一〇年に『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』が刊行された。この第二輯

には、「佚書叢残」として、「論政論兵之類」五十篇、「陰陽・時令・占候之類」十二篇、「其他」十三篇の大きく三部に分けて収録されている。

また第二輯には、第三輯として「篇題木牘」、「散簡」（篇題が不詳の残簡）、「元光元年暦譜」が収録予定だと記されている。

しかし、現時点（二〇一九年三月）で、第三輯は刊行されていない。そこで筆者は、第三輯の出版予定及び現在の整理状況を伺うため、また竹簡の実見調査を行うため、所蔵先の山東博物館に連絡を取った。そして二〇一九年二月十五日、博物館に赴き学術調査を行った。以下では、調査によって得られた情報や、今後の銀雀山漢墓竹簡研究の展望に関する私見を述べたい。

二、銀雀山漢墓竹簡に関する新情報と展示について

当初筆者は、あらかじめいくつかの竹簡を指定し、実見調査を行いたい旨を伝えていたが、質疑に対応していただいた衛松涛氏（図1）の話によると、現在は竹簡の管理が厳しく、実見の許可を得るのが難しいということであった。

実際には、二〇一〇年から新たに撮影された竹簡画像を拝見した他、いくつか質問をさせていただいた。また面会後、郭映雪氏に館内を案内していただいた。以下では、その詳細について記したい。

新図版の出版計画について

筆者が確認した画像は、二〇一九年中に出版予定の新

（図1）衛松涛氏

図版に掲載されるものであった。（図2）第一節で述べた通り、図版は元々、全三輯にまとめて出版される予定であったが、そのシリーズを完結させるのではなく、新たに取り直した写真と釈文をまとめて出版する。

具体的には、二〇一九年九月に『孫臏兵法』『尉繚子』『六韜』を収録した第一分冊を出版し、その後、二〇二〇年中に第二分冊から最終分冊までの図版を全て出版する予定である。分冊の数については未定だが、おおよそ十～十二になるとのことだった。

（図2）竹簡画像を実見する筆者

新図版の竹簡画像・釈文について

新図版に掲載される竹簡画像について、筆者が実見したのは、第一簡～第三簡（『孫子兵法』計篇の冒頭部分）、第三三〇簡～第三三二簡（『孫臏兵法』月戦篇の冒頭部分）、第一九六四簡～第一九七四簡（『天地八風五行客主五音之居』「八風」の一部）、未発表の残簡約八〇本である(注3)。

各簡はそれぞれ、カラー版の鮮明な画像であった。また、文字の書かれてある表面だけでなく、背面の画像も確認できた。これは恐らく、近年、上博楚簡や清華簡・北京漢簡といった竹簡背面に劃痕が確認されたことによると思われる(注4)。さらに、一部の竹簡には赤外線版のモノクロ画像（表面のみ）が存在した。

未発表の散簡（残簡）については断定できないが、概観した所、兵学と政治に関わる内容が多くを占めていることを確認できた。

また衛氏によれば、これまで出版した図版のものと新図版のものとで、釈文に異なる部分が存在するとのこと

だった。

館内の竹簡展示について

戦国楚簡研究会（現中国出土文献研究会）「中国山東省学術調査報告」（『中国研究集刊』第四十八号、二〇〇九年）によれば、二〇〇九年時点での旧館には、竹簡の展示は一切なかったそうだが、現在の新館には存在する(注5)。以下、館内の竹簡展示について述べる。

現在、山東博物館には、竹簡の一部が展示されている。パネルによれば、『孫子兵法』呉問篇と『孫臏兵法』擒龐涓篇が書かれた竹簡が展示されているようであるが、（図3）（図4）のように、辺りが暗いため、実際にどのような文字が書かれているかは確認できない。

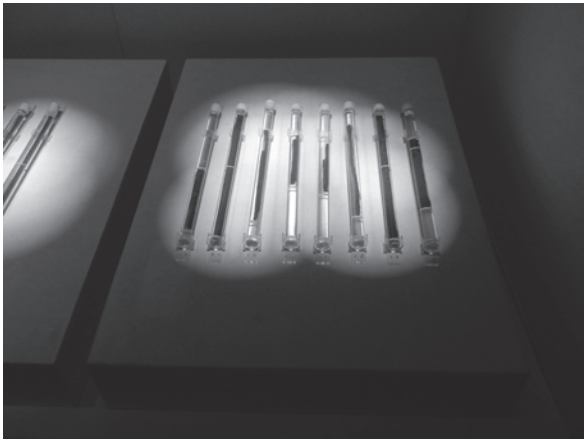
一方、展示の横にはタッチパネルが設置されており（図5）、竹簡のカラー画像と釈文を見ることができる。（図6）画像は鮮明であり、明確に文字を確認することができた。

三、新図版の意義と今後の研究展望について

以上、山東博物館への学術調査によって得られた情報について概述した。ここでは、新図版が刊行されることにより、どのような意義があるのか、また今後どのように研究が発展する可能性があるのか、私見を述べたい。

未公開情報について

前述の通り銀雀山漢墓竹簡は、現時点（二〇一九年三月）で全ての情報が公開されていない。しかし、今後



（図3）『孫子兵法』

『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』で述べる所の「篇題木牘」「散簡」「元光元年暦譜」が公開されることにより、それぞれ関連する方面の研究がさらに発展する可能性が考えられる。

「篇題木牘」とは、『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』の編集説明によれば、具体的には同書所収の「論政論兵之類」第一から第十二篇までの篇題をまとめた木牘を指すが、木牘の画像は未公開である(注6)。

「散簡」は、文字を確認できるか残存状態が悪く、分類が難しい竹簡であり、恐らく筆者が実見した約八〇本の竹簡群を指す。これについては、現時点で画像・釈文共に公開されていない。前述の通り、これらには兵学・

（図４）『孫臏兵法』

（図５）タッチパネル

政治に関わる内容が存在し、既に発表済の文献と何らかの関わりを持つ可能性がある。

「元光元年暦譜」は、「正月丙戌」「正月己酉」等の暦に関する情報が記されている文献であり、天文暦法の研究を進める上で貴重である。既に釈文のみ陳久金・陳美東「臨沂出土漢初古暦初探」『文物』一九七四年第三期）

に掲載されているが、竹簡画像は新図版ではじめての公開となる。

新たな竹簡画像について

これまでの図版では、竹簡画像の彩度が悪く、判読できない部分が存在するため、整理小組の釈文を写真で確認できないことが多かった。しかし新図版では、解像度の高い画像や竹簡背面の画像が新たに公開されることにより、文字学や書誌学を含めた研究全体が発展する可能性が考えられる。

新釈文について

前述の通り衛氏によれば、新図版では竹簡画像だけでなく、釈文も一部変更される。これによって、既に公開されている文献の中でも再検討を要するものが出てくることが予測される。

結　語

以上、今回の学術調査で得た情報について述べた。銀雀山漢墓竹簡は、竹簡の保存状態が悪いこともあり、発掘から長い年月を経ても未公開である情報が存在する。

しかし、新図版の刊行によってその全容が明らかになり、さらに研究が発展することが期待される。

聞くところによれば、関係者以外で新図版で掲載される画像を見たのは筆者がはじめてとのことだった。閲覧・面会申請の対応及び館内の案内をしていただいた郭氏や、質問にお答えいただいた衛氏をはじめとして、博物館の方々に大変お世話になった。ここに記して御礼申し上げたい。

注

(1) 発掘時の様子については、岳南・加藤優子訳『孫子兵法発掘物語』(岩波書店、二〇〇六年)に詳しい。

(2) 銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡　孫臏兵法』(文物出版社、一九七五年)銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡　孫子兵法』(文物出版社、一九七六年)

(3) それぞれの竹簡番号は、第一輯・第二輯のものを参照した。

(4) 劃痕については、各竹簡の図版を参照。

(5) ここで述べる「旧館」とは、一九九二年に建築されたものであり、「山東省博物館」と表記されていた。一方、筆者が訪れた「新館」は、二〇一〇年に開館されたものであり、「山東博物館」と表記される。

(6)「論政論兵之類」については、湯浅邦弘「銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」について」(『中国研究集刊』第五十二号、二〇一一年)を参照。

附記

小論は、「サントリー文化財団　二〇一七年度若手研究者のためのチャレンジ研究助成」(研究課題「日中兵学における択日占の比較研究」)の成果の一部である。